

氏名（本籍地）	大西 光弘（奈良県）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	第230号（乙（文）第96号）		
学位記授与の日付	2023年12月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第2項該当		
学位論文題目	ライブニッツと現象学 — モナドロロジーの脱・形而上学化による現象学的モナドロジ ーの構想の試み —		
論文審査委員	主査	教授	博士（学術） 河本 英夫
	副査	教授	博士（文学） 三重野 清顕
	副査	教授	博士（文学） 稲垣 諭
	副査	教授	博士（文学） 相楽 勉
	副査	本学名誉教授	Ph. D. 山口 一郎

博士請求論文審査報告

大西光弘

ライプニッツと現象学

---モノドロロジーの脱・形而上学化による現象学的モノドロロジーの構想の試み---

本論文の中心課題である「ライプニッツのモノドロロジーの脱・形而上学化」というテーマについては、付帯的に明らかにしなければならない事柄が多い。モノドロロジーの構想そのものは、多くの論者により、すでにさまざまな視点から議論されてきた。それでも現時点でまとまった輪郭をもつ議論として、決着の着いたテーマではない。

こうしたテーマを扱うさいに必要とされるのは、(1)ライプニッツのモノドロロジーの構想は、それじたいどのような性格で、どのような条件設定になっているのか。またそれを理解可能な水準で捉えるためには、何を関連付ければよいのか。

(2)モノドロロジーの発展的な解釈を行うさいに、かりに現象学の意識以前の働きである「受動的総合」を関連付けるさいには、どのような解釈上の展開がみられるのか。

(3)現象学を介したモノドロロジー構想の解釈上の拡張を行った際に、さらにその延長上で、どのような展開見込みがあるのか、あるいは展開可能性はどのようなものになるのか。ことに現実性のなかに出現する多階層そのものがどのようにして形成されるのかが、問われてくる。これらの課題に対応するために、本論文では、第一部、第二部、第三部がそれぞれ割り当てられている。

モノドロロジーは、一般にはモノドをそれとして世界単位とする論理的構想であり、モノドそのものは世界の「最終微小単位」であり、大きさも部分もないと設定される。視覚的イメージで捉えるさいには、積分の演算子の末端に付される「 dx 」がそれに近い。しかもそこには二つの能力が備わっており、それが「世界を表象する能力」であり、もう一つは「運動性の欲求能力」である。前者が認識の能力であり、後者が運動性の能力である。そして特徴的な条件として、「モノドには窓がない」という特質がある。他のモノドとのかかわりや世界とのかかわりにさいして、「窓がない」というかたちでのかかわりとなる。

こうした構想は、数理物理学の設定としては、比較的頻繁にみられるもので、現代の力学では、運動と相互作用だけから、行けるところまで行ってみるという組み立てになっている。力学での運動が運動性の欲求に対応し、相互作用が表象にあたる。物体はまさに物体であることによって相互作用するのであり、物体間の窓を介して相互作用するのではない。

こうしてみると数理物理学的には、モノドの二つの能力は、奇妙な設定ではなく、最小の活動態だけを決めて、そこから進んでみるというやり方である。論理的には、「可能世界論」の構想である。ただしモノドそのものは、エネルギー的な数学的単位であり、化学的原子、分子のようなものではない。

こうした構想を支えるライプニッツの認識理論は、全体性を捉える直観に基礎を置くものであり、認識の基準としては、「無矛盾性」が基本となる。数学的直観にしたがえば、

すべての未来はすでに決定している。未来においてたとえ事故のようなかたちであれ、起きることはすべて決定されている。だが世界は、圧倒的に多様である。一切の未来の決定性と未来の圧倒的な多様性が両立するところに、ライプニッツの多階層的な数的世界が成立している。

現代で言えば、「カオス力学の理論」がこれに近い。この場合のカオスとは、混沌のことではなく、非周期的、非規則的な運動の総体を意味する。カオス運動は、数学的に定式化されるためにすべての運動は決定されている。だが何が起きるかは、人間の位置からは予測できない。ここでは決定性と予測不可能性が両立している。

本論文では、こうした構想を理解するための歴史的な補助線が二つ導入されている。一つは、マールブルク新カント学派に属するカッシーラーの『シンボルの哲学』であり、もう一つが現在のAIの展開にも見られる「集合論的数論」の展開である。

マールブルク新カント学派は、認識のなかでも数的認識を基本的な認識だと考えた。数的認識は、直観的な構成力に依存するもので、現実的な素材はイメージ的な適合性をもつものが主観性によって付与される。そのためカントに見られるような、認識対象の質料的素材は客観からあたえられ、主観はそれを主観性の形式を用いて対象構成を行なうという認識論に代えて、感覚的素材そのものも主観性によって生み出されることになる。このため数的認識、さらに記号的認識は、圧倒的な多様性を獲得することができる。

感覚や感性をつうじた客観由来の質料性の受容ではなく、むしろイメージの対象構成が主題となっている。そこに象徴形式の哲学が成立する。数的、関数的認識こそ、個々の個別的な事物の固有性(変数の値)と、その事象的な関係そのものについての直観把握を可能にしている。

また現代へとつながっていく集合論的数論の系譜は、ライプニッツの構想を可能な限り展開したものだという歴史的経緯として描かれている。数的な公理体系の記号化については、ヒルベルトの数学の記号化の試みにさいして重要な役割を果たしたのが、数学的認識の真偽の基準とされる「無矛盾性」であり、これこそライプニッツの「観念相互の内的無矛盾性」を継承するものである。

だがあらかじめ設定された数的、記号的集合が、それじたいで「無矛盾」であるという証明を、集合内在的に導くことはできない。これがゲーデルの不完全性定理である。すべての数学的問題は、有限個のオペレーションで解決することはできないとするのが、チューリングの思考実験である。ところが生成し続ける数的集合は、集合そのものの範囲を変えて行くために、むしろ機会に応じて、多階層的にならざるを得ない。この多階層性の生成をどのように捉えるかで、議論が分かれてくる。

本論文は、この無限集合が、記号的ではあるが、直観的ではなく、時として「構成要素相互の内的矛盾に気づかず、間違った結論に導かれる」ような事態に直面する可能性を、強く取るものである。これによって本論文は、直観知をさらに前面に出すことで、現象学の側へと接続していく。

この場面から本論文の第二部に入る。現象学の手前で、晩年の西田幾多郎によるモナド解釈(すなわち絶対矛盾的自己同一体としてのモナド)や、ベルクソンの運動の直観知が検討され、視野を広げていく手続きがとられている。

現象学の側からのモノド論の再構成の企ては、すでにかなり多くなされている。というのも現象学の基本的な手続き一式を作り出したフッサール自身が、自我についての議論の限界を突破するために、「モノド論」を自分なりに組み替えようとしているからである。

それを引き継ぐようになされた現代の議論を、本論文では複数個立ち入って検討している。この検討の部分は、後に議論のなかにフッサールの発生的現象学を導入するための導きの糸となっている。本論文では4個の議論が検討されているが、発生的現象学に接続するという点で、重要な二つの項目だけを取り上げる。

論者ハンス・ポーザー「よく基礎づけられた現象——現象学としてのライプニッツのモノドロジー」では、ライプニッツの「現象」概念を手際よく整理しており、ライプニッツのいう「実在する現象」とは「生活の全系列との合致」をなす現象のことだと考えている。これを「一つの生活世界の中へ埋め込まれたもの」として、フッサールの「生活世界」と同一視しようとしている。だがこの解釈は、自然科学の対象の実在をそのまま認める「自然主義的態度」と「還元」を経た「超越論的態度」とをすでに混同しており、自然科学と精神科学の根底にあつて「前学問的経験世界」とされる「生活世界」という研究領域の独自性を見失っていると結論している。この生活世界こそ、モノド論に新たな光をあてるものだとされていく。

第二に検討されるのは、論者クラウス・ケーラーの「意識とその現象——ライプニッツ、カント、フッサール」である。この論文では、ライプニッツとカントとフッサールが「意識と現象」をどう把握したかが問われている。ケーラーは、意識概念を「反省意識」としての「統覚」と理解する。ライプニッツの場合、この統覚は「眠っているときは働かず、覚醒しているときは働く」ものであり、「経験的統覚」と呼ばれる。他方カントにおいて統覚は、「あらゆる人間の表象に随伴する必然的な意識」と考えられるので、これは現象を構成する「超越論的」な統覚だと理解される。

ケーラーは、この「超越論的統覚」を「反省的転回」によって得られたものとみなし、この転回によって、フッサールの現象学的洞察の方法論的な出発点は、すでに根本的に到達されていると解釈している。だがこの解釈は、生活世界における「先述定的明証に基づく経験」という新たな自我意識以前の経験領域を示すフッサールの構想が十分に生かされていないと筆者は論じている。自我意識以前の経験の場所が、発生的現象学が要請される場面である。

ここで検討された二つの論文は、一方では生活世界内での経験を問い、さらに自我以前の経験を問う方向で、「受動的総合」の導入に引き継がれていく。そして「モノドの無窓性」の議論を巡り、従来の既存の解釈では、モノドは「窓をもたない」存在だったことが吟味され、さらに受動的総合をとおして「モノドに窓が開かれていること」が解明されていくような手順が踏まれていく。

そのとき議論の仕組みに活用されているのは、自我概念があらかじめ前提されるのではなく、まさにその発生が問われることである。幼児期においては、人間はいわば「先自我」とでも言うべき状態にあることが、「脱構築」によって、志向性そのものの発展の分析をとおして呈示されている。その次元では「私(自我)と他者(他我)」は未分化であり、たとえば幼児の「伝染泣き」などの現象においては、幼児は他の幼児の泣く際の不快感をい

わば「自他の区別以前に自分ごとのように」感じているとされることになる。このことこそ「受動的綜合においてモナドに窓が開かれている」ことになるとしている。

このフッサールの洞察は、現象学が「エゴロジー」(自我論)から「モナドロジー」(モナド論)へと深化したことを意味し、この深化のプロセスが、本論文では、フッサールの『デカルト的省察』『受動的綜合の分析』『間主観性の現象学』などの著作をつうじて、論述され論証されている。

「発生的現象学の方法論」とはどのようなものであるのか。ここまでの議論の前提にされていたフッサール現象学の「静態的現象学」から「発生的現象学」への新たな展開について、さらに方法論の観点から、その展開の必然性が改めて明示されている。

発生的現象学は、「超越論的独我論」の克服にあたって大きな役割を果たしている。「純粹自我」が「他我」を構成するという場合、他我が超越論的自我に回収されてしまうという「超越論的独我論」に陥らざるを得ない。そしてフッサールはむしろ自我モナドの発展以前の「動物のモナド」等への段階を包含するライブニッツの「モナドロジー」へと関心を向け、さらにそこから「間主観性の構成」が行われていく。

またこのとき重要な事柄として強調されているのは、フッサールの「時間論」の展開と発生的現象学との関わりである。生き生きとした現在においては「原印象と過去把持」とのあいだに構成される時間内容が、受動的志向性による連合をとおして先構成されていることが明るみに出されている。こうして「我思う」という自己意識が介在しない、自我の能作を含まない受動的志向性による「受動的綜合」という経験領域が獲得されたのである。

さらにまた、発生的現象学の方法として「脱構築」の方法が、フッサールのなかで次第に明確になってきたことが取り上げられる。この脱構築は、たとえば自我のような高次の構成層を、いまだそれとして働いていない層として、構成層の全体から「カッコ入れ」によって取り除くことである。そしてその構成層を形成するために潜在的に働いている、より低層の構成層が顕在化する可能性が出現する、という方法が確立されたことになる。

脱構築というのは、実はデカルトの著作ですではっきりと出現しており、見えにくくなっている事象に、隙間を開き、事柄を区別していく手法である。フッサールでは経験の階層区分を明示していくために活用されている。そのさいにひとたびカッコに入れられた層が、より基層から出現して、新たな意味内実を獲得していく仕組みが活用されている。近代の物理学は、基本的には物質と運動を切り分けていくが、たとえば流体から物質をカッコ入れして、運動だけを取り出すような手立てで、脱構築は活用されている。実はモナド論そのものが、脱構築をつうじて再構成され構想されたものであり、当初の「表象と欲求の指定」こそ、脱構築のなかで設定されたものであることがわかる。フッサールが明らかにしたのは、自我意識以前の活動態が明るみに出され、その後上位層の出現の可能性が出てくるという場面であり、そこでの考察である。

さらに本論文では、ここまでの記述を試みが、どのような意義をもつのかの検討がなされている。基本的には、現実内で判別される階層がどのように形成されてくるかが問われている。主に問題とされたのは、「形而上学的次元から生活世界の次元へ引き戻されたモナドロジー」におけるモナドが、どのように働き得るか、すなわち「生活世界」における「動物モナド」や「幼児のモナド」から「人間のモナド」への「モナドの階層的発展」

はどのように理解されるのか、という問題である。

このモナドの階層的発展のモードは、ライプニッツとフッサールにおける目的論の理解の違いによって明らかにされている。ライプニッツの場合は、「微小表象による予定調和」によって規定された決定論的「モナドロロジーの目的論」として理解されている。他方フッサールの場合は、「理性衝動」による「モナド論的目的論」として理解されている。この違いは、アリストテレスの「エンテレケイア」の概念の解釈の違いに由来する。ライプニッツにおいては「すでに到達された完成態」が強調され、フッサールにおいては「内在的な形成原理」による「形成のプロセス」としてのエンテレケイアが強調されていることになる。

次に、このモナドの階層的発展が、M. ポランニーによる「創発」の概念をつうじて三つの観点から考察されている。第一に、創発を「物理的、機械的メカニズム」として解釈する試みとその限界が明らかにされ、第二に、「数学的対象」を「創発における下位と上位の階層関係」として解釈する試みが取り上げられる。そこでは「幾何学の起源」についての現象学的な解明が可能になると指摘されている。さらに第三に、創発が「暗黙知の働きとしての内在化、つまりフッサールの「感情移入」との関連で考察されている。

さらに「ライプニッツの知の「総合」」では、「生活世界へ引き戻されたモナドロロジーが目指す知」と「現代社会で求められる知」との「総合」の指針が考察されている。「階層的な発展におけるモナドロロジー」において、「人間よりも高階のモナド的なもの」の例として、「法人」という社会共同体の構成の可能性が考察されている。これは、高階の「モナド的なもの」の一事例と言えらしている。ここでの階層形成は、集合のなかにより高次の部分集合が形成される仕組みとして考えられている。

本論文は、全体として膨大な関連する事項を配置しながら考察をすすめたものであり、いくつもの補助線の導入をつうじて、モナド論を現象学的な分析の延長上で、発展的な構想だという解釈を実行したものである。

そして文学研究科（哲学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。本審査委員会は、大西光弘氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。